



(謡曲) 小鍛冶

作者 不詳 (宝生流源本に準拠)

能の登場人物

ワキ 三条小鍛冶宗近

シテ 前・童子 後・稲荷明神

ワキツレ 詞 一条の院に仕へ奉る橋の道成にて候。さても今夜

帝 不思議の御告ましますにより、三条の小鍛冶宗近を

召し、御剣を打たせらるべきとの勅詔にて候ふ間、

唯今 宗近が私宅へと急ぎ候。

いかに此家の内に宗近があるか。

ワキ 宗近とは誰にてわたり候ふぞ。

ワキツレ 是は一条の院の勅使にてあるぞと。さても帝、今夜

不思議の御告ましますにより、宗近を召し、御剣を打たせ

らるべきとの勅詔なり。急いで仕り候へ。

ワキ 宣旨 畏つて 承り候。さやうの御剣を仕るべきには、

われに劣らぬもの相錠を仕り手こそ、御剣も成就候ふべ

れ。これはとかくの御返事を申しかねたるばかりなり。

ワキツレ げに、汝が申すところは理なれども、帝、不思議の

御告ましますは、頼もしく思ひつつ、

返すも不審なり。

はやく領承申すべしと、重ねて宣旨ありければ。

よそ人でも。

天に声あり。

地に響く。

壁に耳、岩の物いふ世の中に、

乱る、心なりけり。さりながら御政道、直なる今の御代な

れば、若しも奇特のありやせん。

そののみ頼む心かな。そののみ頼む心かな。

言語道断。一大事を仰せ出されて候ふものかな。

かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。

某が氏の神は稲荷の明神なれば、これより直に稲荷に

参り、祈誓申さばやと存じ候。

なう、あれなるは三条の小鍛冶宗近にて御入り候ふか。

不思議やななべてならざる御事。

我が名をききて宣ふは、いかなる人にてましますぞ。

雲の上なる帝より、剣を打ちて参らせよと、

汝に仰せありしやう。

さればこそ、それにつけても猶々不思議の御事かな。

剣の物も唯今なるを、早くも知し召さるる事、

また我が朝のそのはじめ、人皇十二代、景行天皇。

みことのりの御名をば日本武と申し、が、

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

また我が朝のそのはじめ、人皇十二代、景行天皇。

みことのりの御名をば日本武と申し、が、

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

返すも不審なり。

炎も草も、吹き返されて、天にか、やき地に充ち、く、

狂火は却つて敵を焼けば、

数万騎の夷どもは、怒ちこ、にて失せてんげり。

其後、四海治まりて人家戸ざしを忘れしも、

その草薙の故とかや。唯今、汝が打つべき其の瑞相の御剣

も、いかでそれには劣るべき。

伝ふる家の宗近よ、心安く思ひて下向し給へ。

さて、御身は如何なる人ぞ。

よし誰とてまた頼め。

まづ、勅の御剣を、打つべき壇を飾りつつ、その時我を

待ち給は。

通力の身を変じ、通力の身を変じて、必ずその

時節にまゐり会ひて御力をつけ申すべし侍ら給へど。

夕雲の稲荷山、行くへも知らず失せにけり。

行くへも知らず失せにけり。

尊は剣を抜いて、あたりを払ひ、怒ちに炎も立ち退けど、

四方の草を、薙き払へば、剣の精霊嵐となつて、

には壇が設けられる。後シテは、稲荷明神となり、小飛出という狐の歌

面を被り、冠には狐の像を戴いている。

宗近勅に随つて、即ち壇にあがりつつ、

不浄を隔つる七重の注連、四方に本尊をかけ奉り

警備を捧げ、仰ぎ願はくは。

宗近時に至つて。

人皇六十代。一条の院の御手に、其職の養を蒙る事、

これ私の力にあらず。

伊弉諾 伊弉冉の、天の浮橋を踏みわたり、

豊原を探り給ひし御才より生まれり。

その後、南無佛陀陀、波斯(ヘルシヤ) 弥陀尊者より此方。

天国ひつき(日嗣)の子孫に伝へて今に至れり。願はくは。

願はくは宗近 私の功名にあらず、

普天卒土の勅命によれり。

さあらば、十方恒沙の諸神、

唯今の宗近に力を合はせてたび給へどと、

幣帯を捧げつ、天に仰ぎ頭を地に付け、

骨髄の丹誠 聞き入れ納受せしめ給へや。

謹上再拜。

いかにかや宗近勅の剣、いかにかや宗近勅の剣。

打つべき時節は虚空に知れり。頼めや頼め、唯たのめ。

曲は終末に向かい、稲荷明神と宗近は壇に上がり、相錠で剣を打つ。

(舞動)

童男 段の上にあがり。

童男 壇の上にあがつて、宗近に三拜の膝を屈し、

扱御剣の鉄はと問へば、宗近も恐悦の心をさきとして、

鉄取り出し、教の錠をばつたと打てば。

ちやうと打つ。

ちやうと打つ。

天地に響きて、おびた、しや。

かくて御剣を打ち奉り、表に小鍛冶宗近と打つ。

神体時の弟子なれば、小狐と裏にあざやかに。

打ち奉る御剣の、刃は雲を乱したれば、

天の雲巻ともこれなれや。

天下第一の。

天下第一の。二つの銘の御剣にて、四海を治め給へば、

五穀成就も此時なれや。

即ち汝が氏の神、稲荷の神体小狐丸を勅使に捧げ申し、

これまでなりと言ひ捨て、

又群雲に飛び乗り、又群雲に飛びのりて、

東山稲荷の峯にぞ降りける。

今和三年七月二十二日 東京オリピック前夜

大中臣正比呂 複記

